

7月26日に開幕した「第33回オリンピック競技会パリ大会」(パリ五輪)は、8月11日に幕を閉じた。筆者は高齢(7月に86歳を迎えた)ということもあり競技会場に赴くことができず、もっぱら日刊紙とテレビで楽しませてもらった。

まず日刊紙で目を引いたのは、8月4日付けの日本経済新聞文化欄に掲載された「夕空の下セーヌは流れる」と8月7日付け朝日新聞の「五輪のカメラ3強時代」であった。

慶応大学小倉孝誠教授の「夕空の下セーヌは流れる」では、パリ五輪開会式における大胆で独創的な演出に3つのメッセージを見出している。1つは政治的なメッセージで、グランパレの屋根の上で歌い上げられたフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」に革命時代のマリ・アントワネットを想起し、「フランス共和国の絶えざる変革への意志が

示された」と述べている。2つ目は社会的なメッセージで、中世から現代にいたるまで活躍した10名の女性像を水中から浮かびあがらせ女性との連帯と多様性を強調していた点を指摘している。最後の3つ目は文化的なメッセージで、聖火台の代わりにフランスのモンゴルフィエが発明した熱気球を空中に浮かび上がらせて文化遺産に敬意を表したとの見方を示した。

結論として「華やかな歌やダンスと同時に、友愛と寛容への呼びかけ、変革への断固たる意志、自国文化への誇りがしっかりと表現されていた」との印象的なコメントで締め括っている。

仕事柄注目した「五輪のカメラ3強時代」は、朝日新聞の田中泰子記者のレポートである。「キヤノンとニコンの白黒戦争にソニーが風穴」という見出しに引き込まれ興味深く読んだ。タイトルから推定できるように、世界中のカメラマンが集まるスポーツ競技では、これまでキヤノンとニコンがシェアを分け合ってきたが、「パリ五輪では様相が変わり、ソニーのロゴが目立つようになり3社が拮抗しているように見える競技もあった」という。

戦いの主役として指摘されたのは、3社

のミラーレスデジタル一眼カメラ(「キヤノンのR1」「ニコンのZ9」「ソニーのα1」)である。良く知られているようにソニーは、2006年にコニカミノルタのカメラ事業を手に入れて、以来ミラーレスカメラに注力してきている。東京五輪での「α1」の投入を飛躍のきっかけにして、今回のパリ五輪でなんとか3強入りを果たしたと言ってよさそうだ。

振り返ってみるとパリ五輪の開会式は、パリ中心部を流れるセーヌ川を舞台にして行われ、世界各国・地域の選手を乗せた85艘のボートがトロカデロ広場に向かって進んだ。目を引いたのは、エッフェル塔を使って行われたプロジェクションマッピングで、4時間にわたるショーのハイライトは、セリーヌ・ディオーンがステージに登場して熱唱した故エディット・ピアフの「愛の讃歌」であった。

32競技329種目をすべて終えた後の閉会式は、パリ郊外サンドニのフランス競技場(スタッド・ド・フランス)で行われた。五輪旗がパリ市のアンヌ・イダルゴ市長からロサンゼルス市のカレン・バス市長へ引き継がれ、女性首長同士のセレモニーとなったので「ジェンダー平等を象徴していた」

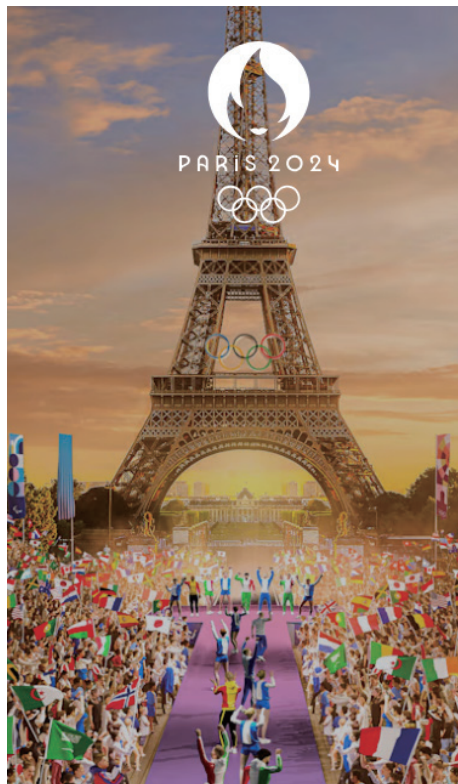


写真1 世界中から選手と観客を迎えた「パリ五輪」は、8月11日に17日間にわたった熱闘の幕を閉じた。(出典: olympics.com)



写真2 「ケーブル・アワード2024第17回ベストプロモーション大賞」のグランプリに輝いたのは、ケーブルワイワイが制作した「Connect & Create NOBEOKA」であった。(出典: wainet.co.jp)

とコメントするマスコミも見られた。しかし何と言っても閉会式のハイライトは、映画「ミッション・インポッシブル」をフランスで撮影中というトム・クルーズが競技場の屋根からワイヤを使って飛び降りるというスタントであった。その後、トム・クルーズは、五輪旗をカレン・バス市長から受け取りオートバイで疾走した。行く先は、言うまでもなくロサンゼルスだ。

もう一つ意表を突いたのは、金色の衣装をまとった「ゴールデンボイジャー」の出現であった。1977年に打ち上げられたアメリカの宇宙探査機「ボイジャー1号」からヒントを得た演出で、アメリカの宇宙開発に敬意を表したものと思われた。

競技の結果として日本は、金20、銀12、銅13と計45個のメダルを獲得した。判断が分かれると思うが、筆者なりに高く評価しているのは、近代五輪の父と呼ばれるクーベルタン男爵が発案したという「近代5種競技」で日本初の銀メダルを獲得した佐藤大宗選手だ。馬術、フェンシング、水泳、レーザーラン（ランニングと射撃を合わせた競技）という日本での練習環境があまり整っていない種目も含んだ5種を見事にこなしてメダルを獲得した。なお、金メダルを獲得したのは、エジプトのアハメド・ゲンディ選手であった。

最後に、翻って日本のテレビ業界を見ると、画期的なのは放送とインターネット配信の両編成の時代を迎えた。NHKは、地上波で放送した競技をNHKプラスで同時配信し、民放も配信の中心をTVerプラットフォームに移した。このためNHKプラスとTVerを合わせればすべての中継・放送がネットで見られるようになった。一例をあげれば、玉井陸斗選手が銀メダルを獲得した高飛び込みは、卓球女子団体の試合と重なったこともありテレビ中継がなく、ネット配信のみでの視聴であった。

「ケーブル・アワード2024」

7月18日と19日に東京国際フォーラム（東京都千代田区）で開催された「ケーブルコンベンション2024」と「ケーブル技術ショー2024」（主催：日本ケーブルテレビ連盟、日本CATV技術協会、衛星放

送協会）については、先月号でレポートしたので参照願いたい。今号では、レポートが間に合わなかった「ケーブル・アワード2024 第17回ベストプロモーション大賞」の贈賞式に触れたいと思う。

開会式に続いて行われたこの「ベストプロモーション大賞」で今回グランプリを受賞したのは、グッドプラクティス部門に応募した宮崎県のケーブルメディアワイワイで、作品名は「映像クリエイターレジデンスプログラム Connect & Create NOBEOKA（通称：コネクリ延岡）」であった。少々分りにくいタイトルであるが、全国から公募で選ばれたクリエイター達が1か月半にわたり延岡市に滞在しながら映像制作にいそしむというプロモーションを丁寧に記録している。このプログラムは、映画「カメラを止めるな」の上田慎一郎監督がメンターを務めるという本格的な取り組みと言える。

この作品が審査員全員の高い評価を得た理由としては、「全国から映像クリエイターを募り、市民と共に延岡を舞台にした映像制作を行うことで地域の活性化に貢献したこと」「合わせて映像メディアとしてのケーブルテレビ事業者の存在感を如実に示した」という2点が挙げられていた。

準グランプリは、射水ケーブルネットワーク（富山県）の「人流ビッグデータの活用で地域の見える化を実現！」とケーブルテレビ富山の「ケーブルテレビはテレビだけじゃない！ネットもスマホもケーブルテレビ！」編と「ネットもスマホもサクサクキャンペーン」編であった。前者は、地元自治体からの業務委託を受けてKDDIの「Location Analyzer」を活用した人流分析を行い、成果物を付加価値として提供する全国初の試みとして評価された。

特別賞は、ケーブルメディア四国（香川県）の「台風の備えに、アンテナ不用のピカピカ光テレビ by

CMS」、笹岡放送（岡山県）の「アプリ“ゆめのわ”を活用した地域連携の促進と情報循環の加速による自社とエリアの活性化」、Kビジョン（山口県）の「文化の木を育てる」に授与された。

これらの他に、キャッチネットワーク（愛知県）の「これからは、『近い』で選ぶインターネットならキャッチ」がケーブル・チョイス賞、J:COM（東京都）の「J:COM TVCM ヨシタカ先生シリーズ」がRBB TODAY 賞を受賞した。

さらに、下記ケーブル事業者6社の作品が優秀賞に輝いた。

ハートネットワーク（愛媛県）の「地域の雇用創出と広告戦略の拡大 えひめ県予企業情報誌 Search 104」

ひまわりネットワーク（愛知県）の「発掘バトル だらヤバイ店に行ってみりん」

キャッチネットワーク（愛知県）の「これからは、『近い』で選ぶインターネットならキャッチ」

GOOLIGHT 社（長野県）の「須坂高校100周年記念事業 The Spirit 未来へ紡ぐ15の物語」

テレビ松本ケーブルビジョン（長野県）の「槍ヶ岳高精細4K 常時中継システム」

CCNetとコミュニティネットワークセンター（愛知県）の「岐阜県白河町・名古屋私立大学経済学部・CNCI グループの産官学連携による地域課題の解決」

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

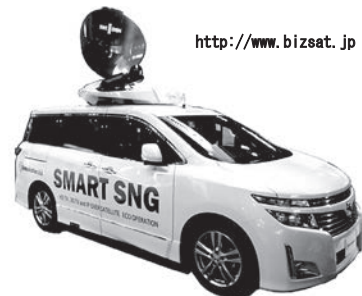
SWE DISH

SMART SNG

HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE ECO OPERATION
スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員
1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m 以下（地下駐車場可）
3.6 KVA NMG アイドリング運用
水圧エコ・ポール4m 搭載
強化サスペンション
国内（100V）海外（240V）対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワンマンオペレーション



設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125

ATcommunications k.k.